

〈 研究ノート 〉

アダム・スミスの価値論における諸価値  
 および真実価格：語法に関する諸見解  
 ——海外におけるアダム・スミスの  
 価値論についての諸研究から——

中 川 栄 治

序

わたくしは、前稿（『広島経済大学経済研究論集』第1巻第3号，1978年12月，に掲載）において、「アダム・スミスの価値論」についての諸研究のサーヴェイの一環として、主に今世紀に入ってから海外において発表された諸研究から、『国富論』におけるスミスの価値論の位置という問題に関する諸見解を整理する作業を行なった\*。本稿は、上記サーヴェイの一環をなし、その第二回目のものであり、スミスの価値論そのものについての諸見解をみる前の一つの準備として、スミスの価値論のなかに見出される諸価値ならびに真実価格というさまざまな諸概念が互いにどのような関係にありまたどのような事柄を示すものとして使用されているかという問題に焦点をしぼり、この問題に直接的にあるいは間接的に言及している主に今世紀に入ってから海外において発表されかつわたくしが見ることのできた諸見解を、わたくしなりに整理することを目的として、作成されたものである。

---

\* 上記前稿で漏れていた諸見解の若干については、本稿末の〈補記1〉を参照していただきたい。

## I さまざまな価値概念

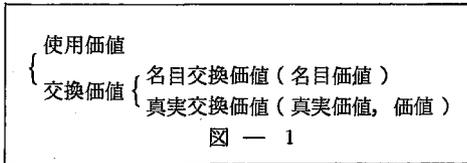
E. ハイマンは、「価格の背後には価値がある。価格は価値のあらわれである。」<sup>1)</sup>と言ひ、S. アムビラヤンは、「価値」という現象は、感覚に感知できるものではないがそれでもなお想像の虚構として片づけられるべき事柄ではなく、それはむしろ、運動という現象についての注意深い観察をつうじて確かめることのできる引力の法則に似たものである、<sup>2)</sup>と云う。そして、F. フォン・ヴィーザーは、スミスが価値についての説明において、二つの互いに矛盾する理論、つまりヴィーザーのいう「哲学的理論」と「経験的理論」とを提示し、そしてその「哲学的理論」において、どのようなものが価値の特徴的な属性と考えられるべきか、我々がなんらかの諸事物にそなわっているとみなし、外見からすれば全く同一なものである他の諸事物にそなわっていないとみなすものはいったい何なのか、また、我々が一定の諸事物に非常に多くそなわっているとみなし、そして、ほかの標準<sup>スタンダード</sup>で測定すればはるかに優れていると思える他の諸事物に非常にわずかしそなわっていないとみなすものは、いったい何なのか、ということ<sup>3)</sup>を明らかにしようとした、と云う。

ところで、周知のように、スミスは、「価値」の問題を論ずるとき、「交換価値」(“value in exchange”)と「使用価値」(“value in use”)を区別し、そして、その区別を水とダイヤモンドについてのいわゆる「価値のパラドックス」<sup>4)</sup>を用いて例示したのであった。この節では、これらの「価値」を含めて、スミスの価値論に見い出されるさまざまな価値概念に關す

- 1) E. Heimann, *History of Economic Doctrines—An Introduction to Economic Theory*—, London, New York, Toronto, 1945, p. 67. 喜多村浩訳『経済学説史』, 中央公論社, 1950年, 109ページ。
- 2) S. Ambirajan, *Malthus and Classical Economics*, Madras, 1959, p. 96.
- 3) F. von Wieser, *Natural Value*, (1889), edited by W. Smart, translated by C. A. Malloch, 1893, reprinted, New York, 1956, p. xxvii.
- 4) スミスにおける「使用価値」, 「価値のパラドックス」, 「効用」といった問題は別の稿において取り扱う予定である。

る諸見解をみることにする。

まず、C. M. ウォールシュは、1903年の著書において、スミスが図-1に示すことができるような価値概念の区別をなしている、とする。つまり、



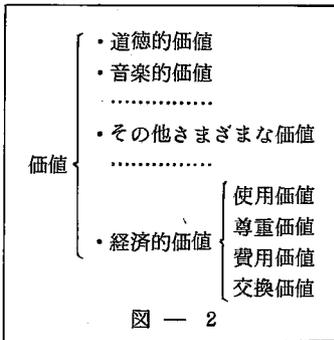
ウォールシュによれば、スミスは、「交換価値」を「使用価値」から区別し、さらに、「交換価値」を「名目交換価値」

(nominal exchangeable value) と「真実交換価値」(real exchangeable value) とに、あるいは、簡略化して「名目価値」と「真実価値」(さらに簡略化して「価値」)とに区別した、とされる。そして、ウォールシュは、スミスが「名目価値」によって単に貨幣での交換価値 (exchange-value in money) を意味し、そして、そのような特殊な交換価値とは区別された意味での一般的な交換価値のための用語を持っていなかったということ、またそのためにスミスはこの種の価値を簡単に片づけてしまい、そしてそれによって全体としての交換価値そのものを簡単に片づけてしまい、そして、もっぱら彼の関心を彼が「真実価値」あるいはさらに簡略化して単に「価値」と呼んだものに限定してしまった、ということを指摘する。なお、ウォールシュによれば、スミスにおいてはこの「真実価値」あるいは「価値」は、混乱を含みながらも交換価値の諸要素のいくつかを保持したけれども、まもなく、交換価値以外の何物かになってしまった、とされる。<sup>5)</sup>

また、C. M. ウォールシュは、1926年の著書において、まさに定義なしでも十分に理解されるという理由からかえって定義することが困難であるといった聞き慣れた言葉があるものだが、「価値」という言葉はそのような言葉の一つであり、また、うへの理由と同じ理由から、価値の定義は、価値の種類についての定義ほどに重要なものでない、とする。ところで、彼によれば、価値一般は、日常生活において非常に広範な意味を持つ

5) C. M. Walsh, *The Fundamental Problem in Monetary Science*, London, 1903, pp. 46-47.

ており、そしてそれは、道徳、音楽、絵画等におけるのと同じようにいろいろな人文科学や自然科学においてさえ使用されるのであるが、そのうちで、経済的価値 (economic value) とは、その一般的な意味においては、「その事物を占有するあるいはできれば占有するであろう人々の福祉および活動との関連で、その占有することのできる事物にそなわる性質もしくは力、あるいは、そのような事物とともかく結びつけられる性質もしくは力である。」<sup>6)</sup>とされる。ウォールシュは経済的価値をこのように定義したうえで、うえにみた性質もしくは力を分類することをつうじて、経済的価値を、「使用価値」、「尊重価値」(esteem-value)、「費用価値」(cost-value)、「交換価値」という四つの種類に分類する。(図-2を参照せよ)



「使用価値」は、我々の諸目的にかなう事物の力、「尊重価値」は、我々をしてその事物を所有することを欲せさせるその事物の力、我々をして、第三の種類<sup>6)</sup>の価値すなわち費用価値の創造に向かう労働という手段によって、その欲せられる事物の獲得を追求させ、

また、その事物を我々が持っている場合には、その事物を補充することの骨折りもしくは犠牲を回避せんがために、我々をしてその事物を保持させる力、とされる。また、「費用価値」は、その事物を獲得するために我々に骨折りを課するといったその事物の力、「交換価値」は、その事物と交換に他の諸事物を獲得するといったその事物の力、我々がその事物の所有を放棄することによって、その時に我々がより大きな欲望を抱くところの換言すればより高い尊重価値を付するところのもう一つの事物もしくは他

6) C. M. Walsh, *The Four Kinds of Economic Value*, Cambridge, 1926, p. 15.

の諸事物を、我々が手に入れることを可能にするその事物の力、とされる。<sup>7)</sup>

ところで、ウォールシュによれば、スミスは、これら四種類の価値のうち、「使用価値」と「交換価値」を区別したのであるが、彼は、これら二種類の価値だけに留まることができずに、他の二種類の価値、つまり、「尊重価値」と「費用価値」とが彼の議論に現われ出ることとなり、しかも、彼はそれらの二種類の価値に「使用価値」や「交換価値」と同格の地位を与える代わりに、そのうちの一つを「交換価値」のもとに包摂してしまい、また、他方のことを表わすために価値の概念から逸脱してしまった、とされる。このことをウォールシュは以下のような形で示している。すなわち、スミスは、交換は財貨と財貨の間だけでなく財貨と労働との間にも生じると考えた。財貨と財貨の間の交換の場合には、たとえば商品Aの所有者がその商品Aを商品Bと交換するとき、スミスによれば、商品Aの所有者にとって、商品Aの「交換価値」もしくは単に「価値」は、商品Bであり、商品Bの価格は商品Aで

7) C. M. Walsh, *ibid.*, pp. 15 - 16. なお、ウォールシュによれば、「交換価値」は、とくに、富 (wealth) の増加ということとあいられる性質を持つ価値の種類であり、それゆえ、経済学においては、「交換価値」は、最も重要な価値の種類であり、いかなる経済学者も無視することのなかった価値の種類である、とされる。それにたいし、「使用価値」は、経済学においては最も重要性の少ない価値の種類である、とされる。その理由として、有用性 (usefulness) あるいは効用 (utility) とは我々の生理学上の諸性質との関連における諸事物にそなわる物理的性質であるのであるが、「使用価値」は、このような有用性あるいは効用とはわずかに異なるものであるからということが、指摘される。たとえば、ウォールシュによれば、有用性あるいは効用という意味では、我々にとってこの世で最も価値のある事物は空気である、というのは空気なしには我々はほんの数分間でさえ生きていくことができないからである。ところで、空気は、我々がそれを我々の肺に吸い込んだ時には、占有されていると言ってもよい、そしてこの理由のゆえに、空気は使用価値を持っていると語っても許されるように思える。しかしながら、太陽や月や星は確かに我々にとって有用ではあるけれども、それらのものを「価値がある」 ("valuable") もと呼ぼうと考える人はいない、というのは、それらのものは、どのようにしても全く、占有されえないからである、とされる。(C. M. Walsh, *ibid.*, p. 16.)

なお、さまざまな財貨のなかにみられる使用価値、尊重価値、費用価値、交換価値の例については、*Ibid.*, pp. 16-19 を見よ。

8) ある。この場合、商品Bの所有者にとって、商品Bの「価値」は商品Aであり、商品Aの価格は商品Bである。それゆえ、そのような交換においては、交換において相対する両側からみれば、「価値」と「価格」とは実際には同一物ということになる。ところが、商品が労働と交換されると想定されるときにはそうでない。つまり、商品Aが一日の労働にたいして与えられ、そして一日の労働が商品Aにたいして与えられるときには、スミス

8) ウォールシュは、前掲の1903年の著書において、スミスが「価格」("price")という用語と「価値」("value")という用語とを明確に区別している、ということを指摘している。ウォールシュによれば、スミスは、ある品物の「価格」をその品物を獲得するために我々が放棄するものあるいはその品物が我々に費やさせるものとし、それにたいし、その品物の「価値」は、その品物を放棄することによって、あるいは、その品物を交換に与えることによって、我々が獲得することのできるものとしている、とされる。

なお、ウォールシュは、スミスにおける「価格」と「価値」に関して、つぎのような諸点を指摘している。つまり、ウォールシュの示すところによれば、スミスは、原始的な社会では諸商品はそれらの諸商品を生産するのに要する労働量に比例して交換されたであろうと考えた、それゆえ、そのような社会ではそれらの諸商品の価格と価値とは一致することになるであろう、しかしながら、我々の住む文明化の進んだ段階では、諸商品は、それらの諸商品を生産するのに必要とされる労働に比例して交換されない、すなわち、それらの商品の労働—費用に比例して交換されないということを、スミスは認識していた。それゆえ、我々の世界では、労働で表わされた諸商品の価値と価格とはもはや一致しないのであり、また、価格の尺度と価値の尺度とは異なるものである。かくして、スミスは、商品の「真実価格」("real price")はその商品を生産するのに必要とされる労働の量であるが、商品の、また、貨幣の、「真実価値」("real value")は、それが購買するであろう労働の量であるとしたのだ、とウォールシュは言うのである。また、ウォールシュによれば、スミスにとって、労働の「真実価格」とは「労働と交換に与えられる生活の必需品および便益品の量」であり、他方、労働の「真実価値」は、労働自体であり、それはつねに同一である。ところでウォールシュによれば、この対比のなかには明らかな欠陥が存在する、とされる。というのは、労働者の労働にたいしてその労働者に与えられる必需品等の量は、彼の労働が購買する必需品等の量と同一である、またそれゆえに、その量は、同じように、彼の労働の「価値」とみなされうるわけであり、それゆえ彼の労働の「価値」はその量とともに変動することになるであろう、というのである。そしてさらにウォ

(注8は次ページへつづく)

にしたがえば、商品Aの所有者にとって、商品Aの「真実交換価値」あるいは単に「真実価値」は、その商品Aにたいして彼が得るその日の労働であり、その日の労働の「真実価格」は商品Aである。しかしその労働者にとっては、商品Aの「真実価格」は、その商品Aを得るために彼が与えたその日の労働であり、彼のその日の労働の「真実価値」は商品Aということになるであろう。ところで、スミスは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth*

(注8のつづき)

ールシュは、スミスの関心はもっぱら「真実価格」の尺度に向けられたのではなく、「真実価値」の尺度もしくは価値の真の尺度に向けられていた、ということ了指摘する。(C. M. Walsh, *op. cit.*, pp.48-49, p.49, n.) なお、ウォールシュは、以上のような指摘につづいて、貨幣の「真実価値」およびその尺度についてのスミスの議論に言及している。(C. M. Walsh, *ibid.*, pp.49-52.)

なお、スミスにおける「価値」と「価格」の関係については、ここでみたウォールシュの見解と異なっていたとせば、J. A. シュムペーターは、『国富論』第1編第5章においてスミスは交換価値を価格と等置している、と述べている。(J. A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter, New York, 1954, p. 188. 東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7巻), 岩波書店, 1955-1962年, 第1巻, 391ページ。)

他方、W. J. バーバは、「……スミスは、ほとんどの経済学者がこんにち適切なものであると考えるであろう諸問題からは幾分距離のある諸問題を提起していたということは、容易にわかる。20世紀中葉の経済学者は、ある特定商品の『価値』を的確に述べることを求められるときには、ふつう、市場がその商品にたいして支払おうとする価格を確定することによって進もうとするであろう。これにたいし、古典派の伝統の中にある著作家たちは、価格と価値はそれほど容易には互いに同一のものには帰されえないということを主張しようと骨を折っていた。『価値』は市場の気まぐれからは独立したものとみられていた。名目(あるいは市場)価格は変動するかもしれない、しかし価値は一定不変に留まる。……」と述べる。(W. J. Barber, *A History of Economic Thought*, Penguin Books, 1967, reprinted 1970, p. 30.)そしてまた彼は、「……このメカニズムについてのスミスの考え方を理解する鍵は、『自然価格』(すなわち価値)の構成要素についてのスミスの解釈のなかに存在する。」と述べているように、バーバによれば、スミスにおける価値は自然価格に相等するものとして把握されている。(W. J. Barber, *ibid.*, p. 32.)

of Nations, edited…… by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library, New York, 1937, —以下, *W. N.* と略記する—— p. 33. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年, (I)——以下, 大河内訳, (I)と略記する—— 57ページ。)と述べている。しかしここで言われている価値は交換価値ではない。というのは、いかなる交換にも何の言及もなされていないからである。労働者はつねに彼の労働にたいして同一の尊重 (estimation) を付すと言うことができるかもしれない、しかしこれは単なる尊重価値でありうるだけである。労働者が彼の(彼自身によって)等しく評価される労働を交換するとき、彼は一つの時点および場所において他の時点および場所におけるよりも、その労働にたいしてより多くの商品Aを得るかもしれない、したがってまた、その労働者にとっては、スミスの用語の使用法からの論理的な演繹によれば、もとの量だけの商品Aはより少ない労働で獲得されるのであるから、商品Aの「真実価格」は低下したことになる、また、彼の労働の「真実交換価値」は増加したことになるであろう。他方、いまや雇主はもとの量の商品Aにたいして労働者のより少ない労働しか獲得しないのであるから、雇主にとっては、商品Aは「交換価値」において低下したと考えられることとなる。<sup>9)</sup>

9) C. M. Walsh, *op. cit.*, pp. 4-6. なお、ウォールシュによれば、スミスは、この労働者の観点と雇主の観点のうち、後者の観点をとり、かつ、労働を「真実価値」の尺度として使用した、とされる。そして、ウォールシュによればこのことは奇妙な矛盾を含んでいる。というのは、労働はその労働者にとってのみ不変なものであるからである、とされる。さらにウォールシュはつづけて、つぎのことを指摘する。つまり、スミスはしかしながらこの問題について広いまた哲学的な見方をとろうと試みたのであり、彼は、労働はすべての物にたいして支払われる「最初の価格」——また、「究極の価格」——であるとする、だが、この価格は労働者たちによってのみ支払われるのであり、そして、自然がもたらすさまざまな源泉を独占しそしてその生産物のある物を手に入れている人々が、それでもって「労働を購買する」とときには、彼らは、彼ら自身にとってつねに同一の価値を持つものを購買しているのではなく、労働者たちにとって同一の価値(尊重価値)を持つものを購買しているだけなのである。労働者たちの標準は、適正には、雇主たちの標準にはされることはできないのである。(C. M. Walsh, *ibid.*, p. 6.)

また、ウォールシュは、スミスにおける費用価値に関してつぎのように述べる。すなわち、ウォールシュによれば、本稿脚注)9を含めて以上でみてきたことは、「すべての時点と場所における」価値に関連するものであるが、「同一の時点および場所における」さまざまな諸商品の相対的な諸価値については、それらの諸価値を、スミスは、それらの諸商品を生産するにあたっての、地代および利潤とともに混ぜ合わされた労働—費用によって説明した、換言すれば、それらの諸商品の交換価値は、それらの諸商品が自然によって売られるところの、しかも労働の形で支払われる、諸価格に、従うとしたとされる。だが、ウォールシュによれば、ここでいわれているこれらの価格は、諸費用と呼ぶほうが適切である、とされる。<sup>10)</sup>そして、ウォールシュは、これを、「……『価格』という誤用された名前のもとに費用価値を隠してしまうというアダム・スミスの別の誤り……」<sup>11)</sup>としている。

他方、A. C. ホワイトカーは、その原版が1904年に出版された彼の著書において、価値についてのスミスの説明を、「哲学的」説明と「経験的」説明とに区別して、考察するのであるが、ホワイトカーは、その哲学的説明をとりあげる準備として、スミスの労働および価値という用語の使用法に言及している。<sup>12)</sup>そこにおいて、ホワイトカーは、スミスの議論には図-3に示されるような価値の概念が現われているということを指摘し、

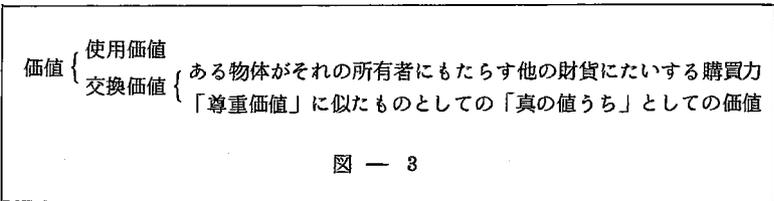
10) C. M. Walsh, *ibid.*, pp. 6-7. なお、ウォールシュによれば、スミスはこの問題には、他の問題ほどには、それほど多くの興味を示さなかった、とされる。

(C. M. Walsh, *ibid.*, p. 7.) また、ウォールシュによれば、「価格」とは、広い意味では、交換において一方が与え他方が受け取るころのものであり、それにたいして、「費用」とは、一人の人がある事物のために手放しそして他のいかなる人も受け取るころのないところのものである。(C. M. Walsh, *ibid.*, p. 7, n. 8.) 「費用」、「価格」および「価値」という言葉については、たとえば、A. H. Jenkins, *Adam Smith Today*, New York, (1948) reissued 1969, p. 49, n. 1, p. 50 も見よ。

11) C. M. Walsh, *ibid.*, p. 8.

12) ホワイトカーは、「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとって等しい価値である、ということができよう。」(W. N., p. 33. 大河内訳(1)57

(注12は次ページへつづく)



それらの諸概念に関して以下のように説明している。つまり、ホワイトカーによれば、スミスはまず価値という言葉が「使用価値」と「交換価値」という二つの意味を持つことを説明し、考察を「交換価値」についての諸原理だけに限定し、そしてこの「交換価値」を、ある物体がその所有者に「もたらす」「他の財貨にたいする購買力」として定義している(*M.N.*, p. 28. 大河内訳(1) 49-50ページ。), しかしながら、スミスは彼が「交換価値」という言葉を二つの意味で使用しているということを説明していないし、また、そのことを認識してもいないように思える、とされる。すなわ

(注12のつづき)

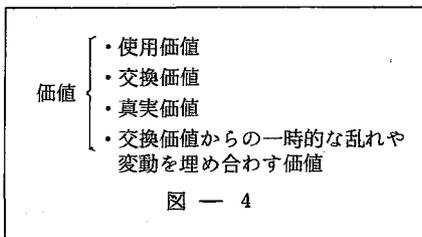
ページ。)というスミスの文章を一例としてとりあげ、スミスのルーズな語法がスミスの価値論を研究することを困難なものにしているということを指摘している。また、ホワイトカーが指摘しているように、J. K. イングラムも、その原版が19世紀に出版された彼の著書において、この文章に言及して、「この文章は、くわしく検討してみればなんの明確な理解することのできる意味も持つものではないということがわかるであろうが、この文章は、形而上学的な思考が経済学的思惟を不明瞭にする道すじについてのよい例を、提供する。労働の種類が決定されていないときに、『労働の量』とは何なのか、また、『等しい価値』という語句によって何が意味されているのか」と述べている。(J. K. Ingram, *A History of Political Economy*, < original edition 1888, this edition first published 1915 > reprinted, New York, 1967, p. 92, n. 2.)

なお、ホワイトカーによれば、ここでの価値は不効用を意味している、とされる。(A. C. Whitaker, *History and Criticism of the Labor Theory of Value*, < 1904 > reprinted, New York, 1968, pp. 17-18.)

なお、ホワイトカーによれば、「労働」という言葉は、スミスの議論において、関連はあるけれども別個の二つの事柄、つまり、一方では、人間の生産力として使用されており、他方では、生産過程において人々が耐え忍ぶ不効用もしくは不快として、使用されている、とされる。(A. C. Whitaker, *ibid.*, p. 19)

ち、ホワイトカーによれば、スミスがある人にとってのなんらかの事物の「真の値うち」(“real worth”)は「それによって彼自身がはぶくことのできる労苦と骨折りであり、換言すれば、それによって他の人々に課することができる労苦と骨折りである」ということ、したがってまた、労働は「すべての商品の交換価値の」真の尺度であるということ<sup>13)</sup>を主張するときには(M. N., p. 30. 大河内訳(1) 52-53ページ)、その「交換価値」は、単なる購買力以外の何物かを意味している、とされる。つまり、ホワイトカーによれば、ある財貨に条件づけられるなんらかの欲望の満足<sup>13)</sup>を我々が感じる時にその財貨が我々の評価において達成するところの意義(Bedeutung)は「尊重価値」あるいは意義としての価値とされるものであり、スミスはこの意味での意義を満足にではなく労働に見出しているけれども、スミスがここで言っている「真の値うち」としての価値という概念は、このような価値と似たものであって、スミスはこれを誤って「交換」価値という名で呼んだ、とされるのである。要約的にいえば、ホワイトカーによれば、スミスは「使用価値」と「交換価値」とを区別したが、「交換価値」に関して、スミスは他の財貨にたいする購買力と、「尊重価値」、「意義としての価値」に似たものとしての「真の値うち」としての価値とを区別することなく、これら二つのものをともに「交換価値」の名で一括している、とされるのである。

また、H. J. ダベンポートは、その原版が1908年に出版された彼の著書において、スミスの議論のなかには、図-4で示されるような価値の概念、



区分が現われている、としている。すなわち、ダベンポートによれば、まずスミスは使用価値と交換価値を区別するが、また「交換価値」と「真実価値」(real value)とを区別している、とされる。ダ

13) A. C. Whitaker, *ibid.*, pp. 19-20, 37-38.

ベンポートによれば、スミスは、分業論における製造業と農業との価値生産性に関する問題を取り扱うさい、社会全体としての費用や社会的所得から区別されたものとしての、競争的費用 (competitive cost) や交換価値の領域にいた、そして、なかば以上意識的に、彼は支出費用 (outlay cost) という考え方を使用しており、暗に、しかし意識的にはなく、置換え—機会費用の原理 (the principle of displacement - opportunity cost) をその最も典型的な形態で使用している。事実スミスはつぎのような状況、すなわち、労働投入の問題としては、あるいは、社会のおよび全体としての労苦、労働—購入費の問題としては、穀物は高価ではなく安価であり、しかしそこでは、競争的費用の問題としては、穀物が、置換え条件のゆえに、費用において高く、価格においてまた交換価値において高価である、といった状況を略述したというのである。ダベンポートは、このような根拠から、スミスが使用価値に言及したのちに、「交換価値」と<sup>14)</sup>「真実価値」とを区別していることは疑いないとし、そして、この「真実価値」とは、価値の規準 (norm) としての労働を担った価値 (labor-burden value)、究極的な費用——「真実価格」(real price)、<sup>15)</sup>「自然価格」(natural price)——にまでさかのぼる価値、費用についての労働—購入という考え方と労働—価値という考え方との間を揺れ動くように思えるところの概念を、意味しているとされる。そしてまたダベンポートは、『国富論』第1編第5章には、暗黙裡のしかも無意識的なしかし明確な、機会費用説 (the doctrine of opportunity cost) の拒否と労働—価値—費用説 (the labor-value-cost doctrine) が存在し、生産物の真実価値は、生産物の量とは関係なく、また、ありうる代替的な生産物といった問題には影響されないものとされている、とする。<sup>16)</sup>

14) なお、ダベンポートは、スミスにおける「交換価値」を市場価値として、また、「真実価値」を「真実価格」と同義的なものとして把握している。(Cf. H. J. Davenport, *Value and Distribution— a critical and constructive study* —, (Chicago, 1908) reprinted, New York, 1964, pp. 12, 13.

15) H. J. Davenport, *ibid.*, pp. 11-12.

16) H. J. Davenport, *ibid.*, p. 12.

さらにまた、ダベンポートは、スミスにおける「真実価値」と「交換価値」について以下のことを指摘する。すなわち、ダベンポートによれば、スミスが、「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人が獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。」——これはダベンポートによればある種の労働費用である——しかし、「あらゆる物が、それを獲得した人にとって、……、真にどれほどの値うちがあるかといえ、それによって彼自身ははぶくことのできる労苦と骨折りであり、換言すれば、それによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。」と言うとき（*W. N.*, p. 30. 大河内訳(I) 52-53ページ）、ここには、「交換価値」にたいする「真実価格」という対照物についての明確な宣言が存在する、とされる。すなわち、「真実価値」とは、それが用いた労働である、しかし、ひとたびあなたがその事物を持ちそして富（riches）としてのその量を、販売可能なものとしてのあなたにとってのその富（wealth）を、交換におけるその効用を、評価しているときには、あなたは、ただ、だれか他の人に労苦と骨折りを課することによってあなたがそれから保護するようにすることができるところの労苦と骨折りに、頼るだけである。あなたが他の人からその人の貨幣あるいはその人の財貨を要求するときには、あなたは、究極的には、その人の労働を取り立てているのである。「貨幣または財貨で買われる物は、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。……それらはある一定量の労働の価値を含んでおり、その一定量の労働の価値を我々は、……、それと等しい労働量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである。」（*W. N.*, p. 30. 大河内訳(I) 53ページ）。かくして、ダベンポートによれば、以上のことが矛盾のないものとされうるかぎりでは、それは、「真実価格」あるいは「真実価値」はつねに達成の労働（the labor of attainment）——ただし、ダベンポートによれば、この労働が、それ自体として一つの価値と考えられているのか、それとも、単に、苦勞と考えられているのかということ、明らかではない——であるということ、意味している。それにたいして、「交

換価値」は、ある事物が、販売によって、その所有者をして免れさせるところの労働、あるいは、購買者をして彼自身の労働によって生産されたある生産物を手放させるさいに、購買において、その事物がその購買者に費やさせるところの労働である。したがってまた、「交換価値」は、真の、そして、究極の、基礎を、「真実価値」のなかに持つように思える、とされるのであった。<sup>17)</sup>

さらにまた、ダベンポートは、スミスはときとして第四番目の種類の価値、つまり、交換価値からの一時的な乱れや変動を埋め合わすところの価値、について語っているように思える、ということ指摘している。<sup>18)</sup>

他方、R. A. マクドナルドは、1912年の論文において、スミスにしたがえば価値は、異なる見地から考察されるのに応じて、図-5に示されるような四つの異なる内容を持つことになるということ、指摘している。そ

I. 労働者の観点からすれば：

A. 商品の価値は、その商品が「体現する」労働の量に等しい(マクドナルドによれば、これはその商品の「真実」価値とされる。)

II. 雇主の(あるいは所有者の)観点からすれば：

商品の価値は、つぎのものに等しい。

- A. その商品がそれと交換される労働の量
- B. その商品がそれと交換される生活の必需品および便益品
- C. その商品がそれと交換される貨幣の額(「名目価値」)

図 — 5

(R. A. MacDonald, 'Ricardo's Criticism of Adam Smith',  
*Quarterly Journal of Economics*, vol. xxvi, August 1912, p. 553.)

して、マクドナルドによれば、スミスはこれらのものを一貫して使用していない、とされる。たとえば、「価値」によってスミスはときとして「真実価値」(I, A)を意味し、またときとして「名目価値」(II, C)を意味し、そしてしばしば、ある商品に実現された労働量(I, A)を、その

17) H. J. Davenport, *ibid.*, pp. 13 - 14.

18) Cf. H. J. Davenport, *ibid.*, p. 14.

商品が市場において購買するであろう労働量（Ⅱ，A）とを混同している、とされ<sup>19)</sup>、そしてまた、彼は、スミスにはリカードにみられるような商品の「真実」価値と「交換」価値との間の関係についての認識がみられない、ということを示している。<sup>20)</sup>

以上スミスの議論に見出されるとされるさまざまな価値概念およびその相互関係に関する諸見解がみられてきたわけであるが、以下、Ⅱでは、とくに、それらの価値概念のうち、スミスにおける「交換価値」概念に関する諸見解を、そしてⅢでは、「真実価値」ならびに「真実価格」概念に関する諸見解をみることにする。

19) R. A. MacDonald, 'Ricardo's Criticism of Adam Smith', *Quarterly Journal of Economics*, vol. xxvi, August 1912, p. 553, cf. p. 556.

20) R. A. MacDonald, *ibid.*, pp. 553-554. なお、マクドナルドも、スミスの議論には、「労働」に関して、「労働」についての労働者の見方（マクドナルドはこれを主観的な見方と名づけてもよいとしている）と雇主の見方（彼はこれを客観的な見方と名づけてもよいとしている）という二つの見方があるということを指摘し、それら二つの見方がスミスの議論においてどのように現われ、そしてその議論にどのような結果、矛盾、混乱をもたらしているか、ということを示している。このことについては、R. A. MacDonald, *ibid.*, pp. 551-553 を見よ。

また、マクドナルドは、スミス自身においては「価値」と「富」（*riches* の意味での *wealth*）との区別がなされていたであろうが、スミスは「価値」という用語を使用するさいに無定見であったために、ときとして、「価値」という用語を「富」（*riches*）と混同した、ということ、また、ときとして、スミスの「価値」は「総効用」を意味している、ということを指摘している。（R. A. MacDonald, *ibid.*, pp. 557-558.）なお、さきにみた H. J. ダベンポートは、『国富論』第 1 編第 5 章には、後にリカードによって明らかにされることとなった「富」（*riches*）と価値との間の区別についての予示が存在することを、指摘している。（H. J. Davenport, *ibid.*, pp. 12-13.）

なお、M. ドップは、「富」（*riches*）と「価値」に関して、つぎのように述べている。「『富』（*riches*）と『価値』の区別は政治経済学のなかに最も古くからある区別の一つであり、この対照の核心は、自然は人間の活動と同様にウエルスあるいはリッチスを生産するが、価値は社会的関係であり、人間の活動の属性であって自然の属性ではない、という点にあった。換言すれば、価値の本質は、富との対照によって、費用たるにあると考えられ、そして費用の本質は、自然と

（注20は次ページへつづく）

## Ⅱ 交換価値

まず、W. リイブクネヒトは、1902年の著書において、スミスにおいては、「交換価値」は、他の財貨を購買するその物の力を意味し、また、その「交換価値」は「<sup>21)</sup> 真実価格」(real price)と同意義である、としている。

他方、C. M. ウォールシュは、1903年の著書において、本稿Ⅰでみたよ

(注20のつづき)

の対照によって、労働にあると考えられていた。。(M. Dobb, *Political Economy and Capitalism, Some Essays in Economic Tradition*, <1st ed., 1937, 2nd revised ed., 1940> reprinted, London, 1960, p. 20. 岡稔訳『政治経済学と資本主義』<1950年のリプリント版の訳>, 岩波書店, 1966年, 18—19ページ。)

なお、スミスにおける「富」(wealth)については、たとえば、J. Bonar, *Philosophy and Political Economy—In Some their Historical Relations*—(1st ed., 1893, 3rd ed., 1922) new impression, London, 1966, pp. 153—154, E. Cannan, *A History of Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848*, (1st ed., 1893, 3rd ed., 1917) reprinted, New York, 1967, pp. 1—19, E. ザーリン著、高島善哉訳『ザーリン国民経済学史』, 三省堂, 1935年, 113ページ, E. Rolle, *A History of Economic Thought*, (1st ed., 1938, 2nd ed., 1945) Kinokuniya Asian Edition, 1975, p. 154, 隅谷三喜男訳『経済学説史』(上, 下), (第2版の訳), 有斐閣, 1970年(上) 196—197ページ, E. ジャム著、久保田明光, 山川義雄訳『経済思想史』(上, 下), 岩波書店, 1965年, (上) 114—115ページ, S. Ambirajan, *ibid.*, p. 98, E. Whittaker, *Schools and Streams of Economic Thought*, Chicago, London, 1960, pp. 103—104, E. G. West, *Adam Smith*, New York, 1969, pp. 168—169, R. B. Ekelund, Jr., F. Hebert, *A History of Economic Theory and Method*, New York, 1975, p. 73, も見よ。

21) W. リイブクネヒト著、八木澤善次訳『英国価値学説史』(W. Liebknecht, *Zur Geschichte der Werttheorie in England*, 1902. ただし、筆者は原著を見ることはできなかった。), 弘文堂書房, 1926年, 45ページ, 46ページ脚注1)。

なお、いうまでもなく、さきにあげられたJ. K. イングラム, J. ボナーは、スミスにおいては、財貨の「交換価値」は、その財貨の他財貨に対する購買力であるという見解を、示している。(J. K. Ingram, *ibid.*, p. 92. 邦訳, 131ページ. J. Bonar, *ibid.*, p. 156.)

うに、スミスにおいては、「交換価値」は「名目交換価値」（あるいは簡単化して「名目価値」）と「真実交換価値」（あるいは簡単化して、「真実価値」、「価値」）とに区別されているということ、そして、スミスはもっぱら彼の関心を「真実価値」、「価値」に限定してしまった、ということを指摘したのであった。そしてまた、ウォールシュは、1926年の著書において、経済的価値は、「使用価値」、「尊重価値」、「費用価値」、「交換価値」という同格の地位を持つ四つの価値概念に区別できるとし、そして、スミスにおいては「使用価値」と「交換価値」が区別されているけれども「尊重価値」と「費用価値」には他の二つの価値と同格の地位が与えられていず、「交換価値」、「尊重価値」、「費用価値」は、混乱した形でスミスの議論のなかに見出される、とするのであった。<sup>22)</sup>

また、A. C. ホワイテーカーは、1904年の著書において、スミスにおいては、「交換価値」という概念は、ある物体がその所有者にもたらす他の財貨にたいする購買力という意味と、「尊重価値」に似たものとしての「真の値うち」(real worth)としての価値という、二つの意味で使用されており、しかもスミスはこのような二つの意味で使用しているということの説明も認識もせず、それらのものを一括して「交換価値」と呼んでいるということ、<sup>23)</sup> 指摘したのであった。

また、R. カウラは、1906年の著書において、スミスによれば分業のゆきわたっている社会では財貨の「交換価値」は、その財貨がその所有者をして交換することを可能にするところの労働量に相応するとされている、<sup>24)</sup> ということを指摘する。

さらに、H. J. ダベンポートは、1908年の著書において、スミスの議論においては「交換価値」はある事物が、それを販売することによってその所有者をして免れさせる労働、あるいは、購買者をして彼自身の労働によ

---

22) 本稿 I でみた C. M. ウォールシュの見解を見よ。

23) 本稿 I でみた A. C. ホワイテーカーの見解を見よ。

24) R. Kaulla, *Die Geschitliche Entwicklung der Modernen Werttheorien*, Tübingen, 1906, S.135.

って生産された生産物を手放させるさいに、購買において、その事物がその購買者に費やさせるところの労働とされているということを指摘した。そして、さらに、さきにみたウォールシュがスミスの議論における「真実価値」を「名目価値」とともに「交換価値」を構成する二つの区分された価値概念としてとらえたのにたいして、ダベンポートは、スミスの議論においては、「交換価値」と「真実価値」とは区別されており、しかも、「交換価値」は、その究極の基礎を、「真実価値」のなかに持つように<sup>25)</sup>思える、という見解を示した。

他方、E. ハイマンは、1945年の著書において、スミスにおいては、「交換価値」は「自然価格」(natural price)に符合する、としている。<sup>26)</sup>

また、J. A. シュムペーターは、すでにみたように、1954年の著書において、スミスは「交換価値」を価格と等置している、ということを指摘している。<sup>27)</sup>

J. P. ヘンダーソンは、1954年の論文で、スミスにおいては、「交換価値」は生産ということにかかわるものともとも同義のもの、交換プロセスではなく生産プロセスにおいて創り出されるものと、見なされており、そして、この「交換価値」の源泉は労働とされていた、ということを指摘している。<sup>28)</sup>

R. L. ミークは、その初版が1956年に出版された彼の著書において、スミスの議論では、商品の(交換)価値の貨幣的表現が「自然価格」にあたり、また、ある物体の「交換価値」はその物体を所有することによってその所有者にもたらされる「他の財貨を購買する力」であり、そして、その物体が「交換価値」を得るのは、その物体が、個々人の別々の労働の生産物の相互交換によって特徴づけられかつそれに依存する社会における、個

25) 本稿 I でみた H. J. ダベンポートの見解を見よ。

26) E. Heimann, *ibid.*, p. 67. 邦訳, 109 ページ。

27) J. A. Schumpeter, *ibid.*, p. 188. 東畑精一訳, 前掲書, 第 1 巻, 391 ページ。本稿脚注 8。

28) J. P. Henderson, 'The Macro and Micro Aspects of the *Wealth of Nations*', *Southern Economic Journal*, vol. 21, no. 1, July 1954, p. 31.

人もしくは諸個人の集団の、労働の生産物だという事実による、ということが意味されている、とする。そしてミークは、スミスが(交換)価値を、商品が社会的労働の生産物であるという事実によってその商品に与えられるところの属性なのだ<sup>29)</sup>と考える傾向を持っており、また、この意味において、そしてこの意味においてのみ、スミスは労働を(交換)価値の「源泉」または「原因」と見なした、とする。

また、L. ロビンスは、1958年の著書において、スミスにおける「交換価値」とは購買力以外の何物でもない、としている。<sup>30)</sup>

O. H. テーラーも、1960年の著書において、スミスにおける「交換価値」は、財貨の、市場での交換における他の諸財貨にたいする支配力、あるいは、当該財貨の一単位数量にたいして他の人々が交換においてすすんで提供しようとする他の諸財貨の数量であるとし、そして、「交換価値」を「市場価値」、「市場価格」と同義のものとして把握している。<sup>31)</sup>

A. K. ダス・ギュプタは、1960年の論文において、スミスにおいては「交換価値」は商品がもたらす「他の財貨を購買する力」を表わしており、そしてこの「交換価値」という概念がスミスの経済学の主要な論題を構成する概念とするのであるが、他方、ダス・ギュプタによれば、この「交換価値」という概念は、単にある比率を意味するのかそれともある絶対的な数量を意味するのかという点で明白なものではない、とされる。しかし彼によれば、スミスにおける「交換価値」は、比率ではなく、測定可能な数量であったのであり、スミスは、商品の交換価値を、うえにみたように、それを所有することがもたらす他の財貨にたいする購買力であると定義し、

29) R. L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, (1st ed., 1956) 2nd ed., London, 1973, pp. 51, 62. 水田洋・宮本義男訳『労働価値論史研究』(初版の訳)、日本評論社、1957年、54ページ、68—69ページ。

30) L. Robbins, *Robert Torrens and Evolution of Classical Economics*, London, 1958, p. 68.

31) O. H. Taylor, *A History of Economic Thought—Social Ideas and Economic Theories from Quesnay to Keynes*—, New York, Toronto, London, 1960, pp. 102-103.

そして商品の(交換)価値の経時的な変動という問題等を解決して交換価値を測定するために、それ自体不変な共通の標準を「支配労働」に求め、商品の交換価値は、交換においてその商品が支配する労働量によって測定されるとした、とされる。<sup>32)</sup>

なお、A. スキナーは、1970年の彼が編集した『国富論』への序文において、スミスが、一財もしくは一財の数単位と他の財とが交換される比率を決定する諸力に関する問題と、基本的には、我々がそれによって一個人によって生産された財貨の総ストックの価値を測定しうる手段しかも他の財貨との交換において使用せられる手段に関する問題といった、異なったものではあるけれども関連のある二つの問題を取り扱うさいに、「交換価値」というただ一つの用語を用いており、このことがスミスの議論を幾分あいまいなものにしている大きな理由だ、としている。<sup>33)</sup>

V. W. ブライドンも、1974年の著書において、スミスが交換価値を「他の財貨を購買する力」と定義したということを指摘するのであるが、彼はまた、スミスが「価値」という用語を多数の意味で使用していることについては我々は寛容であるべきであるとしながら、「価値」という言葉が、ときどき、相対的なものとしての交換価値つまり市場においてそれと交換されるなんらかの他の商品もしくはサービスの量で表わされる価値とは別の概念としての、次節でみる、「真実価格」を表わすために使用されていることを、強調している。<sup>34)</sup>

32) A. K. Das Gupta, 'Adam Smith on Value', *The Indian Economic Review*, The Delhi School of Economics, University of Delhi, vol. 5, no. 2, 1960, pp. 105-108.

33) A. Skinner, 'Introduction' to *Wealth of Nations*, Penguin Books, 1970, p. 47. 川島信義・小柳公洋・関源太郎訳『アダム・スミス社会科学体系序説』, 未来社, 1977年, 100-101ページ。

34) V. W. Bladen, *From Adam Smith to Maynard Keynes: The Heritage of Political Economy*, Toronto and Buffalo, 1974, pp. 9, 7-11.

### Ⅲ 「真実価値」、 「真実価格」

すでにみたように、W. リイクネヒトによれば、スミスにおいては「真実価格」(real price) は「交換価値」と同意義である、とされるのであった。<sup>35)</sup>

他方、C. M. ウォールシュによれば、スミスは「価値」を「使用価値」と「交換価値」に区別し、そして「交換価値」をさらに、貨幣で表わされた交換価値を意味する「名目価値」(nominal value) と、「真実価値」(real value) とに、区別している、とされるのであった。そしてまた、ウォールシュによれば、スミスは「価値」と「価格」を区別しており、したがって「真実価値」と「真実価格」は区別される概念であり、商品の「真実価値」はその商品が購買するであろう労働の量であり、商品の「真実価格」はその商品を生産するのに必要とされる労働の量とされている、とするのであった。<sup>36)</sup>

ウォールシュがスミスの議論における「真実価値」を「交換価値」の一種としたのにたいし、H. J. ダベンポートは、すでにみたように、スミスの議論においては「真実価値」は、「交換価値」から区別されており、しかも「交換価値」の究極の基礎となっている、とするのであった。そしてまた、ダベンポートによれば、この「真実価値」は、価値の規準としての労働を担った価値、生産物の量とは関係なく、また、ありうる代替的な生産物といった問題からは影響を受けないもの、それが用いた労働、達成の労働(the labor of attainment) を意味するとされ、そしてさらに、この「真実価値」は「真実価格」と同義的なものとして把握されるのであった。<sup>37)</sup>

他方、C. リストは、その原版が1909年に出された著書において、「前においては、『真実』価格は労働に基礎を置く価格を意味した。今は、『自然』価格は、その生産費で評価される財貨の価格として定義さ

35) 本稿ⅡでみたW. リイクネヒトの見解を見よ。

36) 本稿ⅠでみたC. M. ウォールシュの見解を見よ。

37) 本稿ⅠでみたH. J. ダベンポートの見解を見よ。

れている。名前の変更はなんの大きな意味も持たない。スミスがその双方において追求していたものは、市場価格の変動の背後につねに隠れているあの真の価値 (that true value) であった。それは同一の問題であるが、しかし新らしい解決をともなった問題である。……財貨の真の価値 (true value) は、その生産費に相応する価値である。……」と述べているように、彼によれば、スミスにおける「真実価格」は「自然価格」と同義的なものとして把握されているといえる。<sup>38)</sup>

また、R. A. マクドナルドによれば、すでにみたように、商品の「真実価値」は、スミスにおいては、その商品が体现する労働の量に等しい、とされるのであった。<sup>39)</sup>

一方、V. W. ブライドンは、1988年の論文において、「我々はまた、一つの科学の揺籃期においては術語が正確でなくまた良好に定義されていないということを想起すべきである。したがって我々は、同一の言葉がいくつかの異なった意味で使用されていることを発見しても驚くべきではない。<sup>40)</sup>」とし、また、スミスにおける価値論についての誤解のほとんどのものは、「真実価格」という言葉のスミスの用法を理解することができなかったことから生じているとして、その論文の多くのページをこの「真実価格」に関する議論にあてているのであるが、<sup>41)</sup> スミスにおける「真実価格」概念そのものに関しては、彼は、1974年の著書でたとえばつぎのように説明している。つまり、スミスは、事物の「真実価格」という用語を、「そ

38) C. Gide, C. Rist, *A History of Economic Doctrines*, authorized translation by R. Richards B. A, 2nd English edition, ... Boston, New York, Chicago, London, Atlanta, San Francisco, Dallas, pp. 94-95. 宮川貞一郎訳『経済学説史』(上, 下), 東京堂, (ただし, この邦訳はフランス語原本からの邦訳) 1948年, (上) 111ページ。

39) 本稿 I でみた R. A. マクドナルドの見解を見よ。

40) V. W. Bladen, 'Adam Smith on Value', in *Essays in Political Economy in Honour of E. J. Urwick*, edited by H. A. Innis, Toronto, 1938, pp. 27-28.

41) V. W. Bladen, *ibid.*, pp. 30ff.

れを獲得するための労苦と骨折り」ということを意味するものとして用いている。これは、K. ボールディングの「人間・時間価格」(“man-time price”)であり、それは生産性の裏がえしあるいはボールディングの「転換係数」(“coefficients of transformation”)の裏がえしである。一国の豊の成長、豊富(plenty)の増加は、労働生産性増進の結果でもある。もし人間を、扱にくい自然から財貨を自分の労働でもって購買しているものと考えれば、そのときには、この労働生産性の増進は、「安価」(cheapness)を招くことができる。「真実価格」は、労働の質が改善されるにつれて、また労働者がそれを用いて働くところの設備の質と量が増進するにつれて、またさらに技術が改善されるにつれて、低下するのである。ところで、ブライドンによれば、まえにもみたように、スミスはときどき「真実価格」を表わすのに「価値」という言葉を使用しているのであるが、この真実価格の概念は明確であり、またそれへのスミスの関心は適切ではあるけれども、それを測定するという問題あるいはその変化を測定するという問題は非常に困難なものである。しかし、スミスが真実価格の変化の大まかな指標以外の何物をも提供しえなかったとしても、真実価格の変化を測定することにたいするスミスの関心と交換価値の決定を説明することにたいする彼の関心を混合すべきではない、ということが指摘される。すなわち、ブライドンによれば、「価値」という言葉は多くの意味を持つが、経済学者にとっては、なんらかの商品(もしくはサービス)の価値は、市場においてそれと交換されるなんらかの他の商品もしくはサービスの量であり、これは、正確で、観察することができ、測定することのできるものである。我々が価値について語ろうと価格について語ろうと、我々が二つの事物の間の一つの関係を取り扱っているということは、明らかである。我々がそれを定義した使用しているように、価値のなかにはなんの内在的なものも存在しはしない。なんらかの一つの財貨の価値は孤立的に語られえない。価値が変化するとき、B 2単位と交換されていたA 1単位が今やB 3単位と交換されるようになったとき、価値において上昇したのはAであってBが低下したのではない、ということではできないのであり、交換関係におけ

る逆の変化の場合にも同じことがあてはまる。もちろん、AとBとの間の交換関係における変化は、たとえば、BにではなくてAに影響を与えたところの技術的改良の結果である、ということを示すことができるかもしれない。このときには、スミスの用語は有用になる。すなわち、この場合には、Bの真実価格が不変に留まっていたのに、Aの真実価格が低下した、ということになる。しかし、つぎのことが注意されなければならない。すなわち、相対的な交換価値における同一の変化は、たとえば、Bの真実価格が不変に留まっている一方でAの真実価格が増加しているということ、あるいはAとBの双方の真実価格が低下しているのであるがAの低下よりもBの低下のほうが大きいということ、またあるいは、AとBの双方の真実価格が増加しているのであるがBの真実価格の増加のほうが小さい、といったことと結びつけられうるということである。換言すれば、諸商品の価値(あるいは価格)は、それらの商品の真実価格の変化を、示しはしない。<sup>42)</sup>それらは、おおよそ、相対的な真実価格の変化を反映するだけである。

そしてまた、ブライドンは、スミスにおける「真実」価値を、厳密な意味での交換価値すなわちうえにみたようなある所与の時点での相対的な価値とは区別されるべきものとして、把握している。<sup>43)</sup>

他方、すでにみたように、J. A. シュムペーターによれば、スミスは「

42) V. W. Bladen, *op. cit.*, pp. 7-10. したがってまた、ブライドンによれば、価値は相対的な概念であるから、人はある財貨(A)の価値がたとえば1800年と1900年の間に低下あるいは上昇したと言うことはできない。正当に言うことのできるのは、せいぜいのところ、BのタームでのAの価値は1900年におけるよりも1800年におけるほうが高かったあるいは低かった、ということぐらいである。つまり、諸価値の階層関係におけるAの位置が変化したのである。そしてまた、ブライドンによれば、スミスは時間をつうじての小麦の価値の変化を語りはするが、そこではスミスは他の事物と相対的な小麦価値の変化を考えようとはしていないのであって、その脈絡ではスミスは真実価格を意味しているのであり、スミスは事物一般および特定の諸事物が手に入れやすくなったか否かという歴史的な問題を取り扱っているのだ、とされる。(V. W. Bladen, *ibid.*, p. 10.)

43) V. W. Bladen, *ibid.*, p. 22.

交換価値」と「価格」とを等置しているとされるのであるが、シュムペーターは、また、スミスにおける「真実価格」を、地域間および異時点間の比較のために「貨幣での価格」に代えてスミスの議論にもちだされたものとし、そしてそれを、我々がたとえば貨幣賃金から区別されたものとしての実質賃金について語るのと同じ意味で、つまり、「貨幣での価格」、貨幣的価格、「名目価格」から区別されたもの、あらゆる他の商品のタームによる価格として把握するとともに、この「真実価格」は、また、それに<sup>44)</sup> つづくスミスの議論では労働のタームで表現された価格に取って代わられている、ということ<sup>45)</sup>を指摘する。

J. P. ヘンダーソンは、1954年の前掲の論文において、スミスは交換システムの分析において、経済にはたらく物質的諸力によって決定される、測定可能な、生産プロセスに由来する、根本的かつ絶対的な価値を明らかにしようとした、とし、そして、「真実価格」は、市場の特殊な事情から影響を受けるものとしての「市場価格」とは区別されるものとしてとらえられ、また、諸商品の「真実価値」は、人間の労苦をつうじて増加させられることができるものとされ、またそれらの商品を生産する骨折りと努力の関数とされている、ということ<sup>46)</sup>を指摘している。

W. A. ヴァイスコフは、1955年の著書において、古典派の経済学者たちは、一方での価値の絶対的な基礎と尺度に到達したいという欲望と他方で価格の相対性についてのなんらかの認識との間を、揺れ動いていた、そして、彼らは、価格とは諸財貨間の相対的な交換関係以外の何物でもない

44) したがってここでは、“real price”は、「真実価格」と訳すよりも、東畑精一氏の翻訳におけるように「実質価格」と訳すほうが、よりふさわしいといえよう。

45) J. A. Schumpeter, *ibid.*, p. 188. 東畑精一訳, 前掲書, (I)891-892ページ。なお, T. サウエルは, スミスの「価値尺度」に関する議論において, 「彼の(スミスの一引用者)『真実の』(“real”)は, とくとして, 支配労働量を表わすものを意味し, またとくとして, 物的産出高の量を意味している。」としている。(T. Sowell, *Classical Economics Reconsidered*, Princeton, New Jersey, 1974, p. 100.)

46) J. P. Henderson, *ibid.*, pp. 30-31.

と考へた、しかしそれにもかかわらず、絶対的な価値という概念を保持しようとした、とする。ヴァイスコフによれば、スミスは労働での真実価格と貨幣での名目価格を明示的に区別し、真実価格は、ある財貨を獲得するのに要する労働量によって、また、それと交換されうる労働量（あるいは労働の生産物の量、それらのものは想像上同一のもの）によって、測定されるとした。そしてヴァイスコフは、そこではこの労働価値は絶対的な、確認することのできる、正確な大きさと考えられているとし、そして、この労働価値を、相対価格（ヴァイスコフはこれを交換価値と同義的にとらえている）と必ずしも一致することのない絶対的な価値の概念として把握する。ヴァイスコフによれば、このような認識にもとづく労働価値説は、市場価格にたいするものとしての自然価格についての理論とともに、絶対一価値概念へと導くものとされる。<sup>47)</sup>

他方、D. F. ゴードンは、1959年の論文において、古典期のいかなる主要な経済学者も近代的な語法でいう労働価値説（ゴードンはこれを「相対価格の労働説」〈“the labor theory of relative price”〉と呼んでいる）と呼ばれるものは主張しなかったけれども、相対価値（交換価値）とは別のものとしての「絶対価値の労働説」（“labor theories of absolute value”）と呼べるものは、スミスやリカードやマルクスによって主張された、ということ指摘するのであるが、そのなかで、ゴードンは、この労働説に共通の要素は、ある絶対的な数がなにか他の経済財とは無関係になんらかの経済財に付されるという考えと、そして、これらの絶対的な数はその商品が購買する労働時間かあるいは「包含する」労働時間かのいずれかであるという考えである、ということ、また、この絶対価値の労働説

47) W. A. Weisskopf, *The Psychology of Economics*, London, 1955, pp. 36-39. さらにヴァイスコフは、スミスの議論においては労働価値、自然価格、生産費価格は、「静止と持続の中心」、市場展開のゴールであり、そしてここに、均衡価格という用語は使用されていないが均衡価格の概念が見い出されるとし、そして、変動する価格の背後にある安定的で絶対的な本質への欲求が、絶対一価値概念と安定均衡の考え方との結合へと導いた、とする。（W. A. Weisskopf, *ibid.*, p. 42.）

と呼ばれるものを解釈するさいには、これらの数と、交換比率によって示されるところの関連はするけれども全く別な数の組合わせとの間の区別をなすことが必須のことであるといったこと、さらに、すべての労働説は、規範的な提議であるということを経験することがより一層本質的なことである、といったことなどを指摘し、そして、スミスはこのような商品の絶対価値をふつつ「真実価値」と呼び、ときどき「真実価格」と呼んでいる、<sup>48)</sup> ということを指摘している。

また、O. H. テーラーは、前掲の1960年の著書において、スミスにおける財貨の、貨幣での市場価格である名目価格と区別された意味での、「真実価格」は、その財貨がその所有者をして購買もしくは支配することを可能にするところの他の人間の労働の量をさしている、<sup>49)</sup> としている。

A. K. ダス・グプタは、前掲の1960年の論文において、『国富論』にはスミスが「真実価格」という用語を価値と同義語として使用しているということを示す多くの証拠が存在する、そのことは『国富論』第1編第5章のタイトル「諸商品の真実価格と名目価格について、すなわち、それらの労働での価格と貨幣での価格について」をみただけでもわかる、そして、「真実価格」は、そのタイトルにおいて示されているように、貨幣での価格である「名目価格」とは別のものである、労働での価格であり、そして「労苦と骨折」は主観的なタームでの労働という概念を明瞭にするために使用された表現である、<sup>50)</sup> としている。

他方、M. ブローグは、その初版が1962年に出版された彼の著書において、つぎのような見解を示している。すなわち、ブローグによれば、事物の「真実価格」(real price、この場合も「実質価格」という訳のほうがふさわしい)はすべての他の財貨にたいするその事物の購買力、貨幣価値の変化に関して補正を加えられたその事物の名目価格なのであるが、スミスは名

48) D. F. Gordon, "What was the Labor Theory of Value?", *American Economic Review*, 49. (May) 1959, pp. 462-467.

49) O. H. Taylor, *ibid.*, pp. 104-105.

50) A. K. Das Gupta, *ibid.*, p. 107.

目価値を、物価水準における変化に関してよりもむしろ貨幣賃金率における変化に関して補正しようとした、とされる。そしてまた、ブローグによれば、スミスは長期間について実質所得を測定することを欲したのであり、そして、彼が労働標準<sup>スタンダード</sup>を選択したのは、貨幣賃金が一般物価よりも変動にさらされることが少ないという確信によるのではなく、経済的厚生の本質についての彼の考え方によるのである<sup>51)</sup>、としている。そしてまた、ブローグは、「真実価値」についてつぎのような見解を示している。すなわち、スミスにおいては、一商品の「真実価値」は、その商品の労働価格であり、そしてその際、労働は、一定数の人間・時間 (man - hours) を意味しているのではなくて、不効用の単位すなわち個人にとっての仕事の心理的コストを意味しているのであり、また、そこでの価値は、交換価値よりもむしろ尊重価値を意味している、とされる<sup>52)</sup>。

また、A. スキナーは、1970年の前掲文献において、スミスにおいては、財貨の(また、所得の)「真実価値」は、その財貨(また所得)によってその所有者が購買または支配することのできる他人の労働の量、彼が支配することができ、しかも(個々の)交換のすべてがひとたび行なわれたときに彼が受け取る(労働単位で示された)財の量によって、測定されなければならないものとされている、ということを指摘している<sup>53)</sup>。

さらに、S. ホランダールは、1973年の著書において、スミスがある商品あるいは商品一般の「真実価値」はその名目価値すなわち「貨幣での価格」と異なるものとしてのその「労働での価格」と定義づけており、そしてそれによってスミスが問題としているのは、時間と空間をこえての「実質所得」の変化を秤量するという近代的な「指数」問題に相当するということ、

51) M. Blaug, *Economic Theory in Retrospect*, (1st ed., 1962) revised edition, Illinois, 1968, pp. 51-52. 久保芳和・真実一男・杉原四郎・宮崎岸一・関恒義・浅野栄一訳『経済理論の歴史』(全3巻)(初版の訳)、東洋経済新報社、1966-1968年、(上)66-67ページ。

52) M. Blaug, *ibid.*, p. 52. 邦訳、67ページ。

53) A. Skinner, *ibid.*, pp. 49-51. 邦訳、105-109ページ。

しかしまた、このような価値尺度財の特定の選択は規範的な意義を持っているということ、さらに、ここで扱われているものは、価値の論理的起源、「交換価値」の理論とは関係がない、ということを指摘して、ホルンダーは、この指標がその本来の目的にどのような論理で用いられているか、ということをつぎのように説明している。すなわち、彼によれば、スミスは、個人の福祉は究極的には消費財にたいするその人の支配の関数であるということを示しているのであるが、専門化の導入により一個人によって消費される多数の財貨は他の人々の労働によって生産されることとなる、かくして、一商品によって支配される労働がその商品の一般的購買力の指標を提供することとなる。このようにして、ホルンダーは、「真実価値」という用語は商品、消費財にたいする購買力にあてはまり、そして、労働にたいする支配はその購買力の指標という間接的手段として役に立っている、とする。他方ホルンダーはまた、「真実価値」には生産の労力費用 (the effort cost of production) という意味での支配労働<sup>54)</sup>ということも含意されている、ということ<sup>54)</sup>を指摘する。

また、D. P. オブライアンは、1975年の著書において、スミスが『国富論』第1編第5章において、支配される労働があらゆる物の「真実価格」であり、その「真実価値」は、その購買者が彼自身からはぶきそして他の人々に課するところの、労苦であるとした、ということ、また、この命題の基礎となっているのは、労働は不変な不効用を持っているという考えであるということ、また、労働の真実価値はスミスが労働の名目価値と呼ぶものすなわち貨幣のタームで表現されたその価格にあたるものから区別されているということ、を指摘する。そしてさらに、オブライアンは、「真実価格」はつぎの三つの明らかに異なった意味で、すなわち、まず第一に、「真実価格」は、ある商品に体现された不効用として、第二に、その用語がこんにち使用されている意味ですなわち貨幣価値の変化について

54) S. Hollander, *The Economics of Adam Smith*, Toronto and Buffalo, 1973, pp. 127-128. 小林昇監修, 大野忠男・岡田純一・斎藤謙造・杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』, 東洋経済新報社, 1976年, 179-181ページ。

の調整がなされたのちの、という意味で、第三に、労働者の生活資料という意味で、使用されている、<sup>55)</sup>ということを指摘する。

## 結びに代えて

以上において、我々は、「アダム・スミスの価値論」に関する諸研究についてのサーヴェイの一環として、スミスの価値論のなかに見出されるとされるさまざまな価値概念および「真実価格」概念、それらの概念の、相互関係ならびに用法についての、主に今世紀に入ってから海外で発表された諸見解を、できるだけそれらの諸見解が発表された年次順に、みてきた。

I)においては、主に、スミスの価値論のなかに見出されるとされる諸価値概念とそれらの相互関係に関する諸見解がみられた。II)においては、それらの概念のうち、「交換価値」という概念がどのような事柄を示すものとして、またどのようにして、用いられているかということについての諸見解がみられた。またIII)においては、「真実価値」および「真実価格」という概念に関する諸見解がみられた。

### <補記1：前稿への補足>

前稿で取り扱われた『国富論』における価値・価格論の位置という問題に関連して、H. ディーツェルはつぎのような見解を示している。すなわち、ディーツェルによれば、水とダイヤモンドの対置から発生する「価値問題」を含めて「価値論」は『国富論』において重要な地位を占めるものではなく、『国富論』第1編第5章およびそれにつづく諸章で展開される「価格論」は「価値論」を迂回して表示されるのであるがこの「価格論」にとっても、また、そのあとの賃金論、利潤論、地代論にとっても価値問題の展開は不必要であったとされる。そしてディーツェルは、「スミスにおいては、価値論は一人の挿話的な人物にすぎない。第4章の終りと第5章の最初の諸ページに登場するのみで、その後は——若干の重要ならざる点を掲げば——二度と楽屋から出ては来ないのだ」と述べる(H. Dietzel, *Vom Lehrwert der Wertlehre und vom*

55) D. P. O'Brien, *The Classical Economists*, Oxford, 1975, pp. 82-83.

*Grundfehler der Marx'schen Verteilungslehre*, Leipzig, 1921, S. 5-10. 渡辺信一訳『価値論の学説価値』, 日本評論社, 1933年, 11-16ページ)。

また, E. ザーリンも, 「価値論」と「価格論」とを別個にとらえ, 『国富論』の全体系のなかでは「価値論」はたいした重要性を持つのではないとし, 中心点に立っているものまたスミスの最も有意義な革新となっているものは, 「価格論」, 価格機構についての叙述であるということを強調している (E. ザーリン著, 高島善哉訳『ザーリン国民経済学史』, 三省堂, 1935年, 110-111ページ)。J. A. シュムペーターは, 彼の『経済学史』において, スミスが価格形成を理論の中心に置いたことを指摘している (J. A. シュムペーター著, 中山伊知郎, 東畑精一共訳『シュムペーター経済学史』, 岩波書店, <1950年> 1970年, 195ページ)。

他方, R. B. アイクランド, Jr. と R. F. ハーバートは, 『国富論』の中心的なテーマは経済成長であり, スミスは国富の成長を強調するのであるが経済成長に対するスミスのマクロ経済的関心は, 確かなミクロ経済的基礎ととりわけ価値論 (ただし彼らの場合, 価値および価格についての議論の双方が含まれている) に依存している, ということを指摘している (R. B. Ekelund, Jr., F. R. Hebert, *A History of Economic Theory and Method*, New York, 1975, p. 61.)。

## <補記2：本稿への補足>

### ㉑ III 「真実価値」, 「真実価格」への補足

E. ロールは, スミスにおける「真実価格」概念に関連して, スミスが一方で労働を商品の真実価格とし貨幣をその名目価格としつつ, 他のところで, 「真実」価格と「名目」価格という語にそれとは別の意味づけを与えている, つまり, 前者は生活の必需品と便益品の量, 後者は労働をも含めたすべての物品と交換に与えられる貨幣量とされている, ということを指摘している (E. Rolle, *A History of Economic Thought*, <1st ed., 1938, 2nd ed., 1945> Kinokuniya Asian Edition, 1975, p. 160. 隅谷三喜男訳『経済学説史』<上, 下>, <第2版の訳>有斐閣, 1970年, <上> 204-205ページ)。

また, G. ミュルダールは, スミスにおける「真実価値」に関して, 「アダム・スミスは真実価値に二つの定義を与えていた。第一は一商品の生産に用いられた労働であり……, 第二は一商品が市場で支配できる労働の量である。疑いもなくアダム・スミスは最初第一の概念をめざしていた。しかし, 賃金・利潤・地代からなる自然価格についての彼の理論においては, 彼は第二の定義に近づいた。」と述べている (G. Myrdal, *The Political Element in the Development of Economic Theory*, translated from the German by Paul Streeten, 1st published 1953, 5th impression 1971, London, p. 67. 山田雄三, 佐藤隆三訳『経済学説と政治的要素』, 春秋社, 第2刷1970年, 106ページ)。

**⑥ 本稿全体への補足**

E. ジャムは、スミスの価値・価格論にあらわれるさまざまな用語に関してつぎのように述べている。「『諸国民の富』の第1編第4, 第5, 第6章は読みにくい。なぜならば、スミスは十分にしっかりした術語をもっていないからである。彼は交換価値(valeur d'échange), 交換しうる価値(valeur échangeable), 真実価格(prix réel), 自然価格(prix naturel)という言葉を, 区別しないで使っている。彼が言わんとしたことを理解するには, 次の点を認めなければならない。すなわち, 価格は交換価値(あるいは『交換しうる価値』)の外的な現われであると思われていたこと, 価格は財貨と貨幣との間の比(名目価格), あるいは種々の財貨の間の比と考えられること, 最後に真実価格はそれ自体, 真実価格と市場価格の二つの側面をもっていること, これである。」(E. ジャム著, 久保田明光, 山川義雄訳『経済思想史』(上, 下), 岩波書店, 1965年, (上)121ページ, 注4。)